

# さらば細川連立政権 訪れた不協和音 小沢一郎氏をたき付ける2 人の事務次官 見切り発車の未明の記者会見 国民福祉税構想は批判 浴び撤回 そして… <細川護熙さんのあそこ>

熊本日日新聞 | 2023年12月30日 05:00



細川護熙首相の退陣会見を立ち止まって見る人たち=1994年4月8日午後3時20分ごろ、熊本市上通アーケード

(聞き手・宮下和也)

—1994年1月29日に政治改革4法が成立し、細川内閣は大きな成果を挙げました。しかし、皮肉にもこの頃から、連立政権の不協和音も聞こえ始めます。その象徴が、わずか5日後の2月3日未明の記者会見で発表した国民福祉税構想です。消費税を廃止して、税率7%の国民福祉税を創設する構想は、国民から唐突だと厳しい批判を受け、撤回を余儀なくされました。前々回のこの欄で「あれはまずかった」と振り返った会見に至るまでの事情を。

細川内閣は税制改革も課題に掲げました。これには財政再建、高齢化社会の福祉財源、バブル崩壊後の景気対策としての大型の所得減税の財源確保などが複雑に絡んでおり、大蔵次官だった斎藤次郎さんと通産次官だった熊野英昭さんが、官邸に何遍も来ていました。来る時は必ず二人でした。二人の考えは要するに、細川政権は人気がある。コメの開放も政治改革もいけそうだということで、この機に厄介なものを片付けちゃおうと、小沢氏（小沢一郎新生党代表幹事）をたき付けてですね。そういう算段が見え隠れしていました。

## 7%の国民福祉税は「増減税セット論」

—それが、税率3%の消費税を廃止して、7%の国民福祉税を創設する、事実上の増税構想ですね。細川政権はコメの部分開放や政治改革を実現したものの、予算の越年編成を強いられるなど、政治日程はずれ込んでいきました。2月11日にはクリントン大統領との日米首脳会談が迫っており、総合経済対策として所得減税を表明する方針でした。『内訟録 細川護熙総理大臣日記』によると、斎藤、熊野の両次官が10月9日に具申したのが、財源を赤字国債に頼るのではなく、15カ月後の増税を織り込む「増減税セット論」です。言ってることは間違いではないかもしれませんが、この際だから、といった不純な感じが…。

そうそう。ほんとにどうしようもないですよ。いきなりそんなこと（増税）をしたら政治的に持たない。内閣がつぶれるぞと言って叱責しました。斎藤さんは大物の次官だったろうけど、細川政権の人気に乗かって、ごり押ししていけるんじゃないかと、そういう判断だったと思います。



1994年2月3日付の熊日

国民福祉税構想を巡る動き(「内訟録」を中心に)

1993年(平成5)10月9日	斎藤次郎大蔵次官、熊野英昭通産次官から意見見申。〈「所得税5兆円、住民税2~3兆円、併せて7~8兆円の減税。消費税は5~6%か〉
11月11日	斎藤次官、小川憲主税局長らが「増減税ワンセット、15カ月タイムラグ」論を展開。〈私からは、今、中間答申の段階でいきなり消費税や実施時期の話を持ち出せば、政治的にもたず、政権崩壊に至るべし。大蔵省のみ残りで政権が潰れかねぬような決断は不可と強く叱正す。大蔵も相当こたえたる様子なり〉
12月5日	〈斎藤大蔵次官、小川官房長も交えて、増減税問題について協議す。増減税ワンセット論は、国民の反発を招くのみ。増税をするなら減税の要なしとの声が国民の大勢なることに、大蔵は未だ鈍感なり。景気対策としての減税と、高齢化社会に向けての増税を切り離してやるべしと、自分や市川氏は主張すれども、彼らはあくまでワンセット論を譲らず〉〈小沢氏は終始沈黙〉
25日	細川首相が宮沢前総理、田中秀征、堤清二氏と会談。
94年1月12日	尾崎護元大蔵事務次官を秘かに公邸に招いて意見聴取。〈「国民すべてのための制度である基礎年金部分につきては、消費税を財源として(あるいは財源の一部として)利用することは一つの考え〉
15日	斎藤大蔵次官らと税制改正の段取り打ち合わせ。〈2月11日の訪米までに6年度政府予算案を決定しておくことが(略)必要なり〉〈私からは消費税を基礎年金に充てるなど、将来国民皆年金が崩壊することを織り込んで、社会党などを説得し得る知恵を出すよう指示す〉〈証言・村山富市氏 (略)福祉にだけ使うというような構想をつくるにしても、それは前段で十分に議論を尽くして、納得したうえでやっていかないと、無理な話だった〉
2月2日	税制改正に関する与党代表者会議と経済問題協議会を断続的に開催。社会党などが難色を示す中、〈最終的に私の決断にて、政府提案として税制改正案を提出することを決す〉〈(3日未明の)記者会見では、7パーセントの根拠についての腰だめ発言(中略)厳しき質問の集中砲火を浴ぶ〉

※〈〉内は「内訟録 細川護熙総理大臣日記」(日本経済新聞出版社)から引用

この話を連立与党に任せておくと、ちょっと危ないなという感じがありました。けどこっちはもう、政治改革とコメの開放が目いっぱい、とても税制の話までやっている時間がない。そこで私は、信頼できる人にアドバイスを求めました。宮沢喜一さんと、役所の方からは直前の次官だった尾崎護さん(当時・国民金融公庫総裁)。尾崎さんの立場もあるもんだから、夜、裏口からこっそり公邸の方に来てもらって意見を聞きました。大蔵から来ている秘書官には用心して、尾崎さんを呼ぶ時は大蔵の秘書官がいない時を狙ってやっていました。

- 『内訟録』には田中秀征さんらと交え、宮沢さんと会った記録が93年12月25日にあります。

〈(宮沢)氏曰く、所得減税について「180兆円の赤字が新規国債発行によって10兆円増えたからと言って一体何が問題なのか。日本の資産が外国に移転するわけなし、現に国債の金利は3% (略)」〉

〈証言・田中秀征氏 表にはあまり現れなかったと思うのですが、細川さんは当時、間接税の税率アップに最大限の抵抗をしていました。宮沢さんも細川さんも私も、景気が順調な回復軌道に乗り、納税者が納得するほど行政経費の節約をやる、そうでなかったら消費税の税率アップは応じるべきではないという考えでした。所得税減税分の増税は、アナウンスすること自体がマイナスだと思っていた。宮沢さんは特にそうで、総理の考えに従わないなら藤井蔵相をクビにしろ、と凄(すご)かった〉(以上『内訟録』日本経済新聞出版社)

- 税率7%という数字を正式に聞かれたのは記者会見の直前ということですが。

直前でしたね。これは意図的にやったのかどうかは分からない、忙しくて伝わってこなかったのかもしれないけど、7%って話は最後まで上がってこなかったんです。10月9日の時点でも、斎藤さんは5%か6%と言っていた。とにかくいろんなことを言っていました。

この問題には小沢さんはもちろん前のめりだったんですが、この際、できるだけ7でも8でも10でもってくらいのつもりだったと思いますね。そういう状態にしておくと後が楽だということだったと思います。

それに対し、市川さん(市川雄一公明党書記長)と私が、大蔵と通産二人の次官に非常に厳しく対応していたわけなんです。その辺は市川さんと全く同じスタンスでした。ほんとに大蔵のおかげで政権つぶれちゃうという危機感を市川さんも持っていました。他の人はあんまり相談しても、相談しがいがないもんだからね。

だから宮沢さんと尾崎さんの話が一番参考になりました。宮沢さんからは、85年のプラザ合意後の不況の時、赤字国債を発行して減税するために4カ月かかって大蔵省を説得し、景気を回復させて大幅な自然増収があった話を伺いました。尾崎さんからは基礎年金の財源に充てる年金税のアドバイスを受けました。

藤井さん(藤井裕久蔵相)と私はとても仲が良くして信頼していたんだけど、ちょっと犠牲になってもらって辞めてもらうかというところまで考えました。増税に前のめりの大蔵省にブレーキがかからないもんだから、藤井さんを切ればブレーキになるわけです。

- 藤井蔵相のスタンスは。

何も言われなかったですね。大蔵大臣だし。大蔵官僚出身でもあるし、やっぱりちょっと動けない立場だったでしょうね。

- 親分の小沢さんは前のめりだし。

だけどそこで、仮に藤井さんを切るということをしてたらね、今度は政権が崩壊しちゃう、つまり新生党が離れちゃうかもしれないという、そういうジレンマがありました。なかなか難しい判断で、そこまでは踏み切れなかったですね。

- 結局、連立与党内の合意が十分に整わない中、訪米に向けて見切り発車に行われた未明の会見は世論の猛反発を買います。「腰だめの数字」という首相の失言、も批判を浴びて、国民福祉税構想は撤回せざるを得なくなりました。

首相在任中、最も悔いの残る出来事でした。あの段階では、日米首脳会談というタイムリミットが決まっていた、もう何ともならなかった。きつい話でした。けどこの局面で増税を推し進めようとした大蔵省は、本当に政治的センスがゼロだと思いました。恐らく大蔵の中にも「こんなところで悪乗りするんじゃないよ」と思っていた人は随分いたと思います。



### 連立瓦解に辞任決断 妻は「ああそう」

一方、このころ細川首相は、佐川急便からの借入金1億円を巡る問題に巻き込まれます。10年以上前に返済済みだったのが、領収証を提示できず、野党自民党から厳しい追及を受けました。ところが、この問題で追及の急先鋒（せんぼう）だった野中広務さんは後に、細川さんに謝ってきたそうですね。

野中さんには当時いじめられたんですけどね、あとではだいぶ仲良くしてたんですよ。「いやあ、あの時は言いすぎて申し訳ありませんでした。ご迷惑かけました」とか言って。総理を終えてから、京都でも何回か会ってます。一緒に食事したりなんかして。

〈証言・野中広務氏 細川さんは気の毒だったと思いました。そういう思いが、攻撃しながらもありましたね。佐川の問題は総理が辞任するような話ではありませんでした。細川内閣は結局、自分で倒れた。予算委員会ではない。国民福祉税で倒れたんです〉（『内訟録』）

でも、今振り返ってみると、多くの人が佐川問題で辞任したという印象を持っているのでは。辞任の決断は、もっと総合的な理由があつてのことでしょうか。

連立が成り立たないような状況になっていましたからね。8頭立ての馬車というのは、ちょっとつついたら崩れるガラス細工というのは本当でした。よく持ったと思います。連立は年が明ける前から、実質的には瓦解（がかい）状態でした。

小沢氏は「明日、武村を切ってくれ」と。それじゃなきゃ一緒にやれんというようなことを言うし、武村氏は小沢氏をはじめ根回しをすべきところには顔を出さずに、社会党や村山氏（村山富市社会党委員長）、あるいは自民党のところにはばかり行っている。一体どこの官房長官だ、付き合い切れんという話が度々ありました。

選挙制度改革が成立するまでは割にみんなまとまっていた。だけど成立してからは、結局、小沢さんたちのグループ、日本新党もそうなんだけど、与党が一つになってまとまって戦わないと、次の選挙ではもう勝てないぞと。だから一緒にやっていこうということでした。これに対して武村さんや村山さんは、いや第三極をつくってやるんだという話です。やっぱりその違いは大きくて、政治改革法が成立した途端に考え方の違いというのがはっきりした。

政治改革4法の成立後、首相特別補佐の田中秀征さんは辞任されましたが、細川さん自身はその時点で辞めようと思ったことは。

辞めたいとは思いましたが、とてもそこで辞められるような政治状況ではありませんでした。コメに続いて二つ懸案を片付けたんだから、これで内閣の使命は終わった。潔く辞める方がいいんじゃないかと、それはありました。でもそれではあまりにも無責任になってしまいます。すぐ後に日米首脳会談も控えていました。

私自身は政権の次のテーマとして行政改革だと見定め、その構想や手順を検討していたわけです。行革をやるために内閣改造をしようと思いましたが、結局3月初めには見送らざるを得なくなりました。やっぱりこれはもう、政権の枠組みを一から作り直さないことには、何もやれないなと、そういう思いを非常に強く持つようになりました。もう行革どころじゃない。何の政策課題もできないのですから。ちょうどそのころ、佐川からの借入金問題で追及されたり、難しい状況でした。

政策課題というより権力争いみたいな。

むき出しの権力争いですね。誰が主導権を握るか。日本新党がこれで解党するだろうから、そこに手を突っ込んで、少しでも自分のところに取り込もうとか。そういう話はとても付き合いきれないところがありましてね。ここら引き時だと。自民党も政権奪取になりふり構わずでした。

細川内閣は9カ月足らずでしたが、お話を伺うと大変濃密な期間だったように思えます。かなりのお仕事をされていますし。まず政治改革法。

その前にやっぱり歴史認識。このインパクトは大きかったですね。中国、韓国だけじゃなくて、アメリカでもヨーロッパでもロシアでも高く評価されました。やっと日本も一人前になったかという。



1994年2月4日付熊日夕刊では国民福祉税の白紙撤回が報じられた



細川氏の辞任表明を伝える熊日夕刊=1994年4月8日付

- 55年体制に代わって登場した内閣として十分に大きな役割を果たしたし、その後も地方分権にせよ規制緩和にせよ、いろんな形で影響を与えています。

- 一応、軌道だけは引きましたから。

- 政治改革法は30年たった今もそのまま使っている。そろそろモデルチェンジしてもいいし、足らざるところは直せばいいとおっしゃりたいでしょうけど。

しっかり土俵だけはつくったんだから、後は足りないところは俵を積みなり修正するなりしてやってもらえたらいいと思うんですけどね。

- 日記を読むと、辞任を決意されたのは4月6日の深夜。その日のうちに佳代子さんに伝え、二人で辞任表明の文案を考えたそうですが、佳代子さんの反応は。

知事を辞める時もそうでしたけど、退任する場合は、基本的に誰にも相談しません。家内にも前の日くらいにしか言いません。家内の反応は「ああそう」ってそれだけ。

- 慰留とかは。

そんなこと言ったって聞かないこと分かってますから。

- 佳代子さん以外は、そんなこと言わずにもっとやっってくださいよって言うのでは。

普通はね。会社だって何だってそうじゃないですか。社長が辞めるっていうと、わざと側近に向かって「わしゃ今度辞めようと思うんだけど、どう思うか」って。そりゃあ「社長に辞められたら困ります。みんなそう思ってます」っておべんちゃらを言うでしょ。それで社長は会長になり相談役になり顧問になり、部屋をもらって車をつけてもらって秘書をつけてもらって、全くいいご身分の会社役員がそこいらにはたくさんいるじゃないですか。日本の社会はみんなそれなんですよ。

## 日本新党は時限政党 60歳で政治に区切り

- 辞める時まで支持率は高かったのですが、4月8日が辞任会見でした。それまで「責任を明らかにせよ」と言っていたメディアは一転して「辞めるのは無責任では」と迫った。どういう心境でしたか。

別に何もなかったですね。まあそんなものだろうと。初めからね、(日本政治の)ベルリンの壁を壊して、歴史認識を明確にして、政治改革とコメの開放をやること決意していた。日本新党の人たちにも、この政党は時限政党です。3年のうちに公約を片付けたら解散しますとやってきました。首相辞任後、94年10月の日本新党の解党式ではこんなあいさつをしました。

ふつう政党というと、まずあまり公約を果たしたなんて聞いたことがない。私は大事な公約は全部果たした。地方分権も規制緩和もある程度、端緒はつけた。支持者の人たちから、なぜこんなに人気のある党をやめるんだと尋ねられたら、われわれは全部公約を果たした。だからここで最初からの公約通り解散する。「やれるもんならやってみろ」って、胸を張ってそう言えばいいんだ。

そう言ったら会場でそれを聞いていた小沢さんが「オレもいっぺんあんなふうに言ってみたい」と言って。全てそうなんだけど、私は目標をはっきりして期限を区切って、そのターゲットをとにかく攻める。そういうことで納得するというか、自分なりに満足するのであって、そのポストを長くやっただけなんてことは初めから考えたことないですね。全てにわたってそうなんです。

- 辞任後は衆院議員としての活動も続け、総選挙も戦いました。最終的には98年4月に、旧民主党、民政党、新党友愛、民主改革連合が合流した民主党の結党に尽力。総理大臣を辞めた後に、これだけはやっておこうという思いがあったのですか。

総理大臣を辞めてからも何年か、衆院議員を続けました。ほんとは辞めたかったんですよ。だけど、最後にああいう形で退任した。決して投げ出したわけじゃないんだけど、まあそういう風に受け止められても仕方ないだろうということもありました。

それで新しい民主党を立ち上げる時は、まとめるまでは頑張ろうと思って、だいぶん苦労しました。あの時は鳩山由紀夫さんも菅直人さんも羽田孜さんも、それぞれのグループの人たちがみんな、なかなか納得しなかったんですね。それを毎晩のように口説いて。



退陣表明の様子を伝える熊日=94年4月9日付

1955年の保守合同では、55年4月から三木武吉、大野伴睦、石井光次郎、岸信介の4人がマラソン会談をやりました。上野辺りの小さな小料理屋の二階の目立たないところで会談を続け、結局7カ月間にわたるマラソン会談をやって、55年12月に保守合同にこぎ着けました。毎晩のように話し合いをやっていただけで、保守合同でもそれくらい時間がかかった。だからそういう気持ちでお互いにやろうじゃないですかとみんなを口説きました。随分反対する人もいたし、鳩山さんも菅さんも決して乗り気ではなかったんです。

だけどそんなこと言ったらね、今度の選挙でみんな生き残れないよと。小さな固まりで終わっちゃうことに満足しないで、そこは大きく腹をもって、自由民主党ができる時だって大変だったんだから、そのくらいのことは覚悟しなくちゃと。

- 民主党の結党大会は98年4月27日でした。その3日後、4月30日に細川さんは衆院議員を辞職。60歳を区切りの政界引退でした。突然のことで仰天しましたが、声明文の冒頭に細川ガラシャの辞世が掲げられていたのが印象的でした。

## 散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花は花なれ 人も人なれ 細川ガラシャ

そっちよりもね、本当は「人生五十功無キヲ愧ズ」という細川頼之の詩の心境でした。

### 人生五十功無キヲ愧ズ

### 花木春過ギテ夏已ニ中ナリ

### 満室ノ蒼蠅掃工ドモ尽シ難シ

### 去リテ禪榻ヲ尋ネテ清風ニ臥セン

- 「満室の蒼蠅（そうよう=青ばえ）」とは結構厳しい詩ですね。

だけど政界はまさにそうじゃないですか。全くその詩の通り。だからこれはいま制作中の漆で書いた書ですが、「蒼蠅」って書きました。これは「異風（いひゆう）」。熊本弁でちょっと変人という意味ですね。

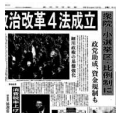
〈そういえば若い頃から、いつまでも政治家をするつもりはないとよく言っていた。しかし一度政治家になると、自分からはなかなか辞められない、もしくは辞めさせないのが世の習いと思っていたので、細川はどうするのか興味深く眺めていた。ところが本当に突然政治家辞職を発表した。彼としてみれば計画通りであっただろうけれど私はいささか狼狽した。〉

妻として一番心配だったのは、「これから生活どうしよう」ということだった。それで細川が国会議員を辞めたときにまず聞いたことは、「政治家って失業保険あるの？」だった（細川佳代子著『花も花なれ、人も人なれ』角川書店）



「蒼蠅」「異風」など、漆で書いた作品を前に政治家時代を振り返る=東京都品川区（小野宏明）

## 細川護熙 私のプリンシプル インタビュー<あのこと>



前の記事

8党派から多彩な政治家集う 強権とはちょっと違った小沢一郎氏 したたかな戦略性の武村正義氏 政治改革とコメ市場開放 「日本のブレア、が出てくれば政権交代ある」<細川護熙さんのあのこと>

2023年10月21日

> この連載・企画の記事一覧

熊本県内のインフルエンザ、前週から1・23倍の3750人 警報レベル上回る流行続く

熊本日日新聞

上場企業の元社長が暴露「株は、絶対これ」

AD（織姫株式会社）

「セイコープロスベックス」には最も大事な機能美がある。カムイ創設者が語る機械式時計の有用性

AD（OCEANS）

【速報】九州学院10位 全国高校駅伝男子

熊本日日新聞

Recommended by